

明るき世界へ

小川未明

青空文庫

一 小さな芽

小さな木の芽が土を破つて、やつと二、三寸ばかりの丈に伸び
 ました。木の芽は、はじめて広い野原を見渡しました。大空を
 飛ぶ雲の影をながめました。そして、小鳥の鳴き声を聞いたので
 あります。（ああ、これが世の中というものであるか。）と考
 えました。

どれほど、この世の中へ出ることを願つたであらう。あの堅い
 土の下にくぐっている時分には、同じような種子はいくつもあつ
 た。そして、暗い土の中で、みんなはいろいろのことを語り合つ

たものだ。

「早く、明るい世の中へ出たいのだが、みんながいつしよに出られるだろうか。」と、一つの種子がいうと、

「それはむずかしいことだ。だれが出るかしのれないけれど、あと腐つてしまふだろう。しかし出たものは、死んだ仲間の分も生きのびてしげつて、幾十年も、幾百年も雄々しく太陽の輝く下で華やかに暮らしてもらいたい。もし、二つなり、三つなりが、いつしよに明るい世界へ出ることがあつたら、たがいに依り合つて力となつて暮らしそうじゃないか。」と、他の種子が答えました。

みんなは、その種子のいつたことに賛成しました。しかし

んなが明るい世界を慕ったけれど、そのかいがなく、土の上に出ることを得たものは、ただ一つだけでありました。

こうして、一本の木の芽は、この世界に出たが、見るもの、聞くものに心を脅かされたのであります。みんなの希望まで、自分の生命の中に宿して、大空に高く枝を拡げて、幾万となく群がった葉の一つ一つに日光を浴びなければならぬと思いましたが、それはまだ遠いことであります。

最初、この木の芽の生えたのを見つけたものは、空を渡る雲でありました。けれど、ものぐさな無口な雲は、見ぬふりをして、その頭の上を悠々と過ぎてゆきました。

木の芽は、鳥をいちばんおそれていたのです。それは、代々

からの神経しんけいに伝わつたっている本能ほんのうてき的のおそれのようにも思おもわれ
 ました。あのいい音色ねいろで歌うたう鳥とりは、姿すがたもまた美うつくしいには相違そういない
 けれど、みずみずしい木きの芽めを見みつけると、きつと、それをくち
 ばしでつついて、食くい切きつてしまうからです。そのくせ、鳥とりは木き
 が大おおきくなつてしげつたあかつきには、かつてにその枝えだに巢すを造つく
 ったり、また夜よるになると宿やどることなどがありました。そんなこと
 を予覚よかくしているような木きの芽めは、小鳥ことりに自じ分ぶんの姿すがたを見みいだされな
 いように、なるたけ石いしの蔭かげや、草くさの蔭かげに隠かくれるようにしていまし
 た。

口くちやかましい、そして、そそっかしい風かぜが、つぎに木きの芽めを見み
 つけました。

「おお、ほんとうにいい木の芽だ。おまえは、末には大木となる芽ばえなんだ。おまえの枯れた年老った親は、よくこの野原のなかで俺たちと相撲を取ったもんだ。なかなか勇敢に闘ったもんだ。この世界は広いけれど、ほんとうに俺たちの相手となるようなものは少ない。はじめから死んでいるも同然な街の建物や、人間などの造った家や、堤防やいつさいのものは、打衝つていっても、ほんとうに死んでいるのだから張り合いがない。そこへいくと、おまえたちや、海などは、生きているのだから、俺が打衝つてゆくと叫びもするし、また、戦いもする。俺は、じつとしていることはきらいだ。なんでも駆けまわっていたり、争ったり組みついたりすることが大好きなのだ。」

木の芽は、まだ地の上に産まれてから、幾日もたたないもので、ものを見てもまぶしくてしかたがないほどでありましたから、こ
う、風におしやべりをされると、ただ空怖ろしいような、半
分ばかり意味がわかって半分は意味がわからないような、ど
きまぎとした気持ちでしたのであります。

「しかし、おまえは、大木になる芽ばえだとはいうものの、そ
れまでには、おおかみに踏まれたり、きつねに踏まれたりしたと
きには、折れてしまおう。そうすれば、それまでのことだ。だか
ら体を鍛えなければならぬ。」と、宇宙の浮浪者である風
は、語つて聞かせました。

哀れな木の芽は、風のいうことをともかくも感心して聞いて

いましたが、

「それなら、どうしたら、私は強くなるのですか。」と、木の芽は、風に問いました。

風は、いちだんと悲痛な調子になって、

「それには、俺がおまえを鍛えるよりしかたがない。いまおまえは、まだ小さくて教えても歌えまいが、いんまに大きくなったら俺の教えた『曠野の歌』と、『放浪の歌』とを歌うのだ。」と、風は、木の芽にむかつていいました。

無窮から、無窮へ

ゆくものは、だれだ。

おまえは、その姿を見たか、

魔物か、人間か。

黒い着物をきて

破れた灰色の旗がひるがえる。

風は、歌つて聞かせました。そして、強く、強く吹き出しまし

た。木の芽ばかりでなく、野原に生えていた、すべての草や、林

が、驚いて騒ぎ出しました。中にも、この小さな木の芽は、柔ら

かな頭をひたひたとさして、いまにもちぎれそうでありました。

粗野で、そそっかしい風は、いつやむと見えぬまでに吹いて、

吹いて吹き募りました。木の芽は、もはや目をまわして、いまに

も倒れそうになつたのであります。

このとき、太陽は、見るに見かねて、風をしかりました。

「なんで、そんなに小さい木の芽をいじめるのだ。おまえが騒ぎさわ狂くるいたいと思おもつたなら、高たかい山やまの頂うえへでも打ぶ衝つるがかいい、それでなければ、夜よるになつてから、だれもない海うみの真まん中なかで波なみを相あ手いてに戦たたかうがかいい。もうこの小ちいさな木きの芽めをいじめてくれるな。」と、
太たい陽ようはいいました。

風かぜは、太たい陽ようにむ向むかつて飛とびつきそうに、空そらへ躍おどり上あがりました。そうして叫さけびました。

「私わたしは、この小ちいさな木きの芽めをいじめるのではありません。強つよく、強つよく、強つよくならなければ、どうしてこの曠こう野やの真まん中なかでこの木きの芽めが育おい立たちましよう。そうするには私わたしが、木きの芽めを、強つよくするように鍛きたえなければならないのです。」

太陽たいようは、あきれたような顔かおつきをして、しばらくぼんやりと見み下おろしていましたが、

「私わたしのいうことを守まもらんと、おまえを三千里りも四千里りも遠方えんぽうへ追おいやつてしまどうぞ。これから、芽めが大きいおおくなるまで、おまえはけつして、あんなに烈はげしく吹ふいてはならない。」と、太陽たいようは風かぜに命めいじました。

風かぜは、声低こゑひくく、「放浪ほうろうの歌うた」をうたいながら、海うみの方ほうをさして去さつてしまいました。後あとで、太陽たいようは哀あわれな木きの芽めをじつとながめたのであります。

「もう驚おどろくことはない。おまえを苦くるしめた風かぜは遠とおくへ去さつてしまつた。これから後あとは、私わたしがおまえを見守みまもつてやろう。」と、太たいよ

陽はいいました。

木の芽は、生まれて出た世の中が予想をしなかつたほど、複雑なのに頭を悩ました。そして、空恐ろしさに震えていました。

「おまえは寒いのか。なんでそんなに震えているのだ。」と、太陽は、怪しんで聞きました。

木の芽は、風に吹かれて、体がたいへんに疲れてきました。そして、のどがこのうえもなく渴いていたので、ただ雨の降つてくれることを望んでいましたが、しかし、そんなことを口に出していいもされずに、不安におそわれて震えていたのです。

「かわいそうに、おまえは、ものがいえないほど寒いのか。それ

で、震ふるえているのだらう。もう安あん心しんするがいい。風かぜは、あちらへいつてしまった。私わたしが、おまえを思おもいきつて暖あたためてやるから。」と、太陽たいようはいいました。

そして、太陽たいようは、急きゆうに熱ねつと光ひかりをましました。その熱ねつは雲くもを散さんじてしまいました。そして、やっと地ちの上うえに伸のびたばかりの木きの芽めは、小ちいさな葉はがしぼんで、細ほそい幹みきは乾かわいて、ついに枯かれてしまいました。

太陽たいようは、そのことには気きづかずに、日暮ひぐれ方がたまで下界げかいを照てらしてました。

二 幸福こうふくの島しま

ある国くににあつた話はなしです。人々ひとびとは、長い間ながあいだの版はんで押おしたような生活せいかつに疲つかれていました。毎日まいにち同じおなようなことをして、朝あさになるとはね起おきて、働はたらき、食くい、そして日ひが暮くれると眠ねむることに飽あきてしまいました。

みんなは、仲なかよく暮くらすことを希望きぼうしていましたけれど、どうしても、このことばかりはできなかつたというのは、ある人ひとがたくさん金かねがもうかつたときには、一いっ方ぽうではまたたいへんに損そんをするというようなくあいだ、みんなの気持きもちちがいつも一つではなかつたから、怒おこるものもあれば、また喜よろこぶものがあり、中なかには泣なくものまた笑わらうものがあるというふうで、その間あいだに嫉妬しつと、嘲罵ちやうば

の絶たえる暇ひまもなかつたのでありました。

「ああ、なんで俺おれたちは、産うまれてきたのだらう。産うまれたかいないというものだ。毎まい日にち、こんなような同おなじことを繰くり返かえして死しんでしまわなければならぬのか？」と、人ひと々びとはため息いきをついていいました。

春はるになると、花はなが咲さきました。ちようどその国くに全ぜん体たいが花はなで飾かざられるようにみえました。夏なつになると、青葉あおばでこんもりとしました。そして、秋あきがくる時じ分ぶんには、どこの林はやしも、丘おかも、森もりも、黄き色いろになつて風かぜのまにまにそれらの葉はが散ちりはじめました。冬ふゆが過すぎ、また春はるがめぐつてくるといふうに繰くり返かえされたのであります。この国くにには、昔むかしからのことわざがありました、夏なつの晩ばん方がたの海うみ

の上うへにうろこ雲ぐものわいた日ひに、海うみの中なかへ身みを投げなげると、その人ひとは貝かいに生まれ変わる。また、三年ねんもたつと、海うみの上うへにうろこ雲ぐもがわいた日ひに、その貝かいは白はくちよう鳥ちように変わかわってしましまう。白はくちよう鳥ちようになるなると自由じゆうに空そらを飛とぶことができる、白はくちよう鳥ちようは遠とおい、遠とおい、沖おきのかたなにある「幸福こうふくの島しま」へ飛とんでゆくといいうのでありまます。

「幸福こうふくの島しまがあるといいうが、それはほんとうのことだらうか。」
ある人ひとが、この国くにでいちばん物知ものしりといいうわさのたかたかひとむかむかつて問といました。物知ものしりはもうだだいぶ年としをとつた、白髪しらがのまじつた老ろう人じんでありまました。

「それはほんとうのことだ。幸福こうふくの島しまへゆゆけば、いまこの国くにでまちがつていいるよようなことは、たとえ見みようと思おもつても見みられな

い。そのうえ、山へゆけば木がしげつてゐる。土を掘ればいい水
 がわいてくる。岩を破れば、金・銀・銅・鉄などが光つてゐる。
 野原には花が咲き乱れ、田や、畠にはしぜんと穀物が茂つてい
 る。そこへさえゆけば、人は眠つていて楽に生活がされるから、
 たがいに争うということを知らない。ただ、しかしその幸福の
 島へいくのが容易でない。波が荒いし、恐ろしい風が吹く、また、
 深い海の中には魔物がすんでいて、通る船を覆してしまふ。だれ
 も、まだその島にいったものがないが、島には、人間が住んで
 いるということだ。また幸福の島の女は、天使のように美しい
 ということだ。昔から、その島へいつてみたいばかりに、神に願
 をかけて貝となつたり、三年の間海の中で修業をして、さら

に白鳥はくちようとなったり、それまでにして、この島しまに憧あこがれて飛とんで
 ゆくのであつた。白い鳥しろとりは、その島しまにゆくと、花はなの咲さいている野の
 原はらの上うへで舞まうのである。またあるときは、いつも緑みどりの色いろの変かわら
 ない林はやしの中なかで歌うたい、あるときは、美うつくしい女おんなの肩かたに止とまつて愛あいされ
 もするといふが、じつに不思議ふしぎなことだ。」
 物知ものしりの老人ろうじんは答こたえました。この話はなしを聞きいた人ひとは、目めをみは
 りました。そして驚おどろきました。
 「なぜ、こんな不思議ふしぎな話はなしをもつと早く、みんなに聞きかせてはく
 ださらなかったのですか。」と、老人ろうじんに向むかつていいました。
 「こういう話はなしは、世よの中なかを騒さわがせるものだから、あまりしないほ
 うがいいと思おもつたのだ。」と、物知ものしりは答こたえました。

この話は、いつか国じゆうに伝わり広まったのであります。

生活に興味を失っている若い人々の中では、毎日うな

だれて沈んでいるものもありましたが、一命を賭けても、幸福

の世界を見いだしたいと思つたものもありました。そして、夏の

日が海のかなたに傾いて無数のうろこ雲が美しく花卉のように

空に散りかかったときに、身を投げて死んだものもありました。

こうして、死んだ人々に対しては、だれも悲しいというよう

な感じを抱きませんでした。このままこの国に朽ちてしまつて土

となるよりは、生まれ変わつて幸福の島へゆくことがどれほど

楽しい愉快なことであるかしれなかつたからです。

そして、海の中に身を投げて死ぬほどの勇氣もなく、いたずら

に、醜く年を取つて木の枯れるように死んでしまふことが、その美しい死に較べたら、どんなにか陰気で、また暗い事実でありましたでしよう？

日が沈むころになると、毎日のように、海岸をさまよつて、青い、青い、そして地平線のいつまでも暗くならず、明るい海に撞れるものが幾人ともなくありました。海は、永久にたえず美妙な唄をうたっています。その唄の声にじつと耳をすましていると、いつしか、青黒い底の方に引き込められるような、なつかしきを感じました。

まれには、月の光が、波の上を静かに照らす夜になつてから、感がきわまつて、とつぜん海の中に身を躍らしたのもあつたの

です。

生まれ変わるという信仰しんこうが、どれほど味気ない生活せいかつに活気かつきをつけたかしれません。「死し」ということがこんなに、このときほど意義いぎのあることに思われたかわかりません。

「死しなずに幸福こうふくの島しまへ渡わたれないものだろうか。」

多くの人々ひとびとの中には、身みを海うみに投なげてしまつて、はたして、

ふたたび生まれ変わるだろうかという疑うたがいをもつたものもおりま

す。その人々ひとびとは死しなずに、どんな冒険ぼうけんでもやってみて、その

島しまへたどり着つきたいものだと思おもいました。そして、そのことを年とし

よりの物知ものしりにたずねました。

「ゆけないこともあるまいが、なにしろ遠とおい。その島しまへ渡わたるまで

には怖ろしい風の吹いているところがある。また、大波の渦巻
 いているところがある。魔物のすんでいる深い海をも通らなけれ
 ばならない。その用意が十分できるなら、ゆけないこともないだ
 ろう。」と、なんでも知っている老人は答えました。

かんがぶか
 考え深い、また臆病な人たちは、たとえその準備に幾
 年費やされても十分に用意をしてから、遠い幸福の島に渡る
 ことを相談しました。

それからというものは、みんなは働くことに張り合いを得まし
 た。あるものは、海を渡る船について工夫を凝らしました。ある
 ものは、いろいろな器具について考えました。またあるものは、
 その島についてからのことなどを研究して頭を悩ました。

しかしその悩みは、行く末の幸福を得ることのために愉快でありました。早く、その未知の島にゆきたいものだと思ひなは心で思いました。どんな困難や辛苦がこの後あつてもそれを切り抜けてゆこうという勇氣がみんなの心にいいたのであります。

太陽は、赤く、暮れ方になると海のかなたに沈みました。そのとき、炎のように見える雲が地平線に渦巻いていました。

「幸福の島は、あの雲の下のあたりにあるのだろう。」と、みんなはその方を望みながら、いいました。やがて、日がまったく沈んで、空の色がだんだん暗くなると、地平線は波に洗われて、雲の色の消えてゆくのを惜しんだのであります。

ある日のこと、人々がいつものごとく、海岸に立って沖の

ほう
方をながめていました。そのとき、なにか一つ黒い点くろてんのようなものが、夕空ゆうぞらをこなたに向かむつてだんだん近づちかいてくるように見えたのであります。みんなはしばらく、目めをみはつてそのものに気きをとられていました。

「あれは、なんだろうか。こちらに向かむつてこいでいるようだ。」
「幸福こうふくの島しまから、魁さきがけをして、こちらの国くにへやってきたのではな
いか。」

「なんにしても、いまに着ついたら、すこしぐらい沖おきのようすがわかるだろう。」と、みんなは、くびを差さし伸のばして黒いものくろの岸きしに近寄ちかよるのを待まっていました。

だんだんとその黒いものは近づちかいたのであります。すると、小ちい

さな船ふねで、それには三人にんのものが乗のつていたのであります。やつとその船ふねは汀みぎわに着つきました。船ふねから下おりた三人にんのものは、目めばかり鋭すく光ひかつて、ひげは黒くろく、頭かみ髪みはのびて、ほとんど、骨ほねと皮かわばかりにやせ衰おとえていたのです。

「みんな俺おれたちの顔かおをば忘わすれてしまつたらう。十年ねんばかりまえに沖おきへ出でて、大風おおかせのためとおに遠とほくへ流ながされたものだ。」と、その中なかのいちばん背せのたか高い男おとこがいました。

ひとびとは、十年ねんばかり前まえにあつた大暴風雨だいぼうふううの夜よのことを記憶きおくから呼よび起おこしました。そして、三人にんのものがいまだに行方不明ゆくえふめいであることを思おもひ出だしたのであります。

「よく帰かえつてきた。もうみんなは死しんだものと思おもつていた。おま

えたちは、幸福こうふくの島しまにでも救すくわれていたのか？」と、群集ぐんしゅう
 の中なかから、一人ひとりがいました。

「幸福こうふくの島しま？」と、そのとき、三人にんの中うち一人ひとりが、自分じぶんの耳みみを怪あや
 しむように、大きな声おおこえで聞き返かえしました。

「そうだ。幸福こうふくの島しまに長い間ながあいだ、住すんでいたかと聞きくのだ。」と、
 群集ぐんしゅうの中なかから一人ひとりが答こたえました。

「ばかにするのじやくか？ 地獄じやくから、やっと逃にげ出だしてきた俺おれたちに
 向むかって、幸福こうふくの島しまとはなんのことだ？ おまえがたは、久々ひさびさ
 で帰かえってきたものを侮ぶじやく辱じやくするつもりなのか。」と、三人にんは、青あお
 い顔かおをして怒おこりました。

みんなは、意外いがいなできごとおどろに驚おどろいて、三人にんをやつとのことことでな

だめました。

「ちようど、ここから見ると、あの太陽の沈む、渦巻く炎のよ
 うな雲の下だ。その島に着くと、三人はひどいめにあつた。朝か
 ら晩まで、獣物のように使役された。俺たちはどうかしてこの島
 から逃げ出したいものだと思つたけれど、どうすることもできな
 かつた。日が暮れると海辺へ出ては、火をたいて、もしやこの火
 影を見つけたら、救いにかけてはくれないかと、あてもないことを
 願つた。三人は、ついに丘の上の獄屋に入れられてしまった。そ
 して、長い間、その獄屋のうちで月日を送つたのだ。たまたま月
 の影が、窓からもれると、その月を見て遠い海のかなたのふるさ
 とをしのんだ。ある晩のこと、三人は、その窓から逃げ出した。

そして、ようようの思いで、助かつてここまで逃げてきたのだ。」
 と、三人は、くわしく物語りました。みんなは、年寄りの物知
 りにあざむかれたことを憤りました。

「ああ、俺たちはばかだった。あの老人が、自分でいきもしな
 い『幸福の島』などというものを知っているはずがなかったの
 だ。あの老人を、だれがいつたいたい物知りなどといったのだ。そ
 して、あの老人のおかげで幾人海の中へ身を投げて死んだか
 しれない。」

みんなは、老人を海岸へひきずってきました。そして、み
 んなをあざむいたことをなじりました。すると、老人は、案
 外平気な顔をしていました。

「昔は、『幸福の島』だったのだ。しかし、それがいま『禍の島』に変わってしまったのだ。それをだれが知っていたいよう。けつして、私の罪じゃない。」

けれど、みんなは老人のいうことを承知しませんでした。そしてついに老人を三人の乗ってきた小船に乗せて、沖の方へ流してしまいました。みんなは、これで復讐がとげられたとおもいました。もうこれからは、みんな物知りなどというものがいなくて、この国の人々が迷わされる心配のないのを喜びました。しかし、そうした喜びもつかのまのことでありました。

みんなは、また、前のように生きている望みを失ってしまいました。なんのために、自分らは、こうして味気ない生活を

けなければならぬのか。

「禍わざわいの島しまでもいいからいつてみたい。」といって、まれには船ふねを押し出おだしていくものもありました。

未知みちの世界せかいに憧あこがれる心こころは、「幸福こうふくの島しま」でも、また、「禍わざわいの島しま」でも、極きよくど度に達たっしたときは変かわりがなかったからです。とにかく、みんなは、たがいに欲よくぶか深かであつたり、嫉妬しつとしあつたり、争あらそい合あつたりする生せい活かつに愛あい想そうをつかしました。そして、これがほんとうの人生じんせいであるとは、どうしても真しんに信しんじられなかつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「明《あか》るき世界《せかい》へ」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明るき世界へ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>